

被災者との触れ合い語る

釜石でボランティア 海星学院高生

東日本大震災の被災地、岩手県釜石市でボランティア活動を行った海星学院高の生徒が21日、体験を語る講演会を室蘭市立翔陽中(伊藤博明校長、327人)で開き、中学生を前に被災者の声に耳を傾けることや命の大切さを訴えた。



現地で撮影した写真を見せながらボランティア体験を語る海星学院高の生徒

翔陽中で報告「気持ちを分かち合うことが大切」

海星学院高は大震災の翌年の2012年10月から被災地でのボランティア活動を始め、年1回、生徒5、6人を派遣。終了後、生徒自らが室蘭市内の学校などで体験を語ってきた。今回の講演では翔陽中の全校生徒に対し、昨年7月に派遣された1、2年生の計6人が一人ずつ、スライド写真を見せながら話した。

6人が主に行ったのは「傾聴ボランティア」。1年生の下田蒼さん(16)は、話を聞いた被災者の女性に「ありがとう」と手を握ってくれた体験を披露。「女性の笑顔が忘れられない。被災者と喜びや悲しみを分かち合うことが大切」と活動を振り返った。

1年生の伊藤千滉さん(15)は「だれかを亡くしたという話をたくさん聞き、自分はいま身の回りの人を大切にしているかと思いつた」と語りかけた。

翔陽中2年の鈴木結理さん(14)は「被災者のつらさが分かった。自分もボランティアに行ってみたい」と話していた。

(片岡麻衣子)